PARCO

広告特集

パルコ50周年に寄せて

池袋PARCOのオープンから50年。今年、パルコは節目の年を迎えます。たくさんの方に支えられた50年。この機会に特に関わりの深い8名に、パルコとの今まで、パルコのこれから、思い思いの言葉を寄せていただきました。

「お祭りの場」であり続けなければ、お代は取れない。

美輪明宏
歌手・俳優・演出家

渋谷PARCOができた当時、建物のデザインはもちろん、石岡瑛子さんデザインのポスターや山口はるみさんのイラストが強烈な印象だったのを憶えています。野暮ったさの残る渋谷が、あれから文化の街へと変わっていきましたからね。

78年にパルコ劇場で『枯葉の寝床』(演出・出演)を上演して以来、パルコとは芝居と音楽会を制作、上演を重ねています。PARCO出版では、『人生ノート』(98年初版)から『愛の大売り出し』まで8冊。思い起こせばこの40年、パルコにはいろいろな形で稼がせてあげました(笑)。

新しい渋谷PARCOは、現在の多種多様なお客様のニーズにどのような着眼点で応えるのか楽しみです。私なら通路を狭くして、お客様が混雑するようにします。すると「お祭り」の雰囲気が生まれるでしょう?

心配なのは、新しいパルコ劇場がどうなるか。以前、パリ・オペラ座の支配人から、劇場は「お祭りの場」にしなければお客様からお代は取れない、と伺いました。共感した私は、前のパルコ劇場の椅子と絨毯を赤に変えていただき、自宅から鏡や額、壁紙などを運び込んでロビーやお手洗いも華やかにしていただきました。するとお客様が入場された瞬間に感嘆の声を上げられた。そこから徐々にパルコ劇場自体のファンも増えていったと聞いています。新しい劇場もそうなるよう、劇場を熟知した方々を交えて空間や音響システムなどをしっかりデザインしていただきたいです。寺山修司さんの『毛皮のマリー』をはじめ、いろいろ上演してみたくなるような劇場になればうれしいのですが。私自身も、新劇場に見合った出し物を考えないとね。

世の中、一寸先は闇。頭が痛くなる心配事ばかりですが、まあ、何とかなるようになるでしょう(笑)。

16歳よりプロの歌手として活動。日本のシンガーソングライターの元祖として『ヨイトマケの唄』など多数の唄をつくる。主な舞台作に『黒蜥蜴』『双頭の鷲』など。主な著作に『人生ノート』『ああ正負の法則』『花言葉』など。今春、舞台『毛皮のマリー』を東京他で上演。

人々の目標となる生き方や感性を示しつづけてほしい。

小池一子
クリエイティブディレクター
十和田市現代美術館館長

69年に池袋PARCOが誕生する前年、私とパルコとのお付き合いが始まりました。当時は、既製服が変革のときを迎えていて、ファッションの世界で仕事をしようと、マンションの一室にミシン一台で服づくりを始める人がたくさん出てきた時代。当時のパルコ代表・増田通二さんがそういう人たちを池袋PARCOに誘い、事業化への道筋をつけていました。そんなことをする商業施設はほかになくて、そこには真新しいもの、面白いものが集まっていたと記憶しています。

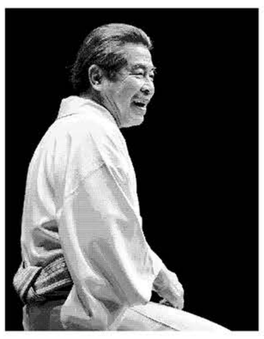
一方、消費者の側では、女性のあり方もファッションの意味も今とは違い、やっとこれから「女性の文化」が広がりつつある時期でした。そんな中、私が提案したのが「スタイリストの時代」という考え方。好きな洋服を選んでコーディネイトする、皆がスタイリストになれる時代が来ると予感したんです。同時期に石岡瑛子さんらが「強い女・自立した女」を広告で端的に表現していたときに、その思想を噛み砕いて伝える役割を担っていたと思います。

それにしても幸せな時代でした。私も含めて新しいことを始める人が続々と出てきて、それを受け入れるだけの余裕や勢いが社会にあって。パルコは決まりきったものの考え方にはとらわれずに、よりよい生き方を求める人の目標になるような、思想や感性を提案してきた会社です。私がやったことも、当時の女性たちを触発することができたんじゃないかしら。これからの時代なら、大量消費の波に飲まれることなく、私たちの「文化を求める心」を鍛えていってほしい。ずっと文化というものが一番大切だととらえてきたパルコだからできることだし、そのためには演劇も映画も音楽も必要で、感性に関わる領域で新しい芽を育て開花させていってほしいですね。

早稲田大学文学部卒業。70年代より、西武セゾングループのコピーライティングを多数手がけた。80年、「無印良品」の創設に参画以来、アドバイザリーボードを務める。日本初のオルタナティブ・スペースを創設するなど、展覧会のディレクションも多数手がける。

「場」が生むもの。新しい「場」に期待すること。

立川志の輔
落語家



96年から渋谷PARCOが一時休業する16年までの20年間、毎年パルコ劇場で落語をやらせてもらいました。最初は2日間貸してほしい、と私から願い出て始まった話が、年を経るごとに3日間になり1週間になり、10周年の年には1か月やりませんかと言っていただいた。パルコ劇場といえば演劇のメッカ。名だたる劇作家、俳優がしのぎを削り、パルコ・プロデュースの冠を信じて観にくるファンがたくさんいる劇場です。そんな場所で、しかも当時は落語の「ら」の字もない渋谷という街で、お正月の1か月を使って落語を聴かせるというのは、本当にすごい決断だったと思います。もちろん嬉しいんですが、同時に難しさも感じました。おしゃれな街の真ん中、ファッションビルの9階にある劇場にふさわしい落語をつくらなくてはならなくなったんです。この場所で普通の古典落語はできないな。ならばここに合う落語とは何かと考え始めたことが「志の輔らくご」のきっかけになり、今の自分をつくる一因になったと思います。

パルコ劇場で落語会を始めて12年目、一度も来たことがなかった師匠・立川談志が客席に座ったことがありました。途中で帰るのかと思ったら「弟子の落語を客席ではじめから終わりまで聴いたのは初めてだ」と、最後ステージで三本締めまでしてくれて。パルコ劇場はそんな瞬間をつくってくれた場所でもあります。やはり一時休業の日はたくさんのいい思い出にとらわれましたが、また新しい渋谷PARCOができる。ただ買い物をするだけではなくて、行けば必ず変化がある、必ず何か驚きを与えてくれる場所であってほしい。そしてそこを通り抜けた先で、新しい劇場の神様が私にどんなものをつくらせるのか、今からわくわくしています。

83年、立川談志門下に入門、90年、真打昇進。15年には紫綬褒章受章。96年から毎年パルコ劇場で公演を行う。06年から建て替えまで、毎年1月に落語会としては異例の1か月公演を敢行。渋谷のお正月の風物詩となっていた。

時代の節目に先立ち、その次をリードする新しさを期待します。

箭内道彦
クリエイティブディレクター

2020年を視野に入れ、今、東京の至るところで変化が起こっています。その前年である今年、パルコが50周年を迎えて、さらに核となる渋谷PARCOが再開するというのは何か運命的なものを感じます。2020に向かう機運を見ると、オリンピック・パラリンピックが終わった後に、はたと立ち止まってしまう人も多いのではないか。そんな中で、パルコが先んじて新しいことを始めてくれるという期待があるんだと思います。

近年、広告の世界で仕事をしていると「リブランディング」という言葉を聞くことが多くなりました。ひとつの時代の節目を迎えているんだなと感じます。それはつまり、企業や団体が「魂はどこにあるのか、やるべきことは何か」をそれぞれに突きつけられているということ。本質を見失わず、歴史を捨て去ることなく、新しい何かに生まれ変わることができた事例となるべく。渋谷の街と並走して、リードして、渋谷とともにあり続けた渋谷PARCO。その本質が街と、そこに根づくカルチャーにあるなら、この後どういう形で新しい文化を構築するのか。パルコは今まで多くのブランドやクリエイターを育ててきました。同じように、50年目以降のパルコをじっくり育てていってほしい。創業から49年目までに積み上げてきたものとは違う新しさが、渋谷から、世界から、心待ちにされています。

タワーレコード「NO MUSIC, NO LIFE.」など、数々の話題の広告をディレクション。「SPECIAL IN YOU.」「Last Dance.」ほか、パルコの宣伝クリエイティブを長く手がけている。渋谷のラジオ理事長。東京藝術大学准教授。

谷中 敦

東京スカパラダイスオーケストラ

学生時代、ファッションとサブカルチャー、ストリートカルチャーを内包したパルコの活動は(あえて活動と呼ばせてください)、きらきらして、しかも決して敷居が高いわけではなかった。ほんの少しだけ背伸びすれば、すんなり覗いて入っていける憧れの世界や、少し先の未来を指差すように教えてくれました。渋谷の街自体が今のインターネットのような働きをしていた頃、僕にとってはその中枢にPARCOがありました。なので、一時休業するときに、公園通りで演奏させてもらったのはとっても素敵な思い出です。

世界を股にかける大所帯スカバンド・東京スカパラダイスオーケストラのバリトンサックス担当。ボーカル曲の主な作詞も手掛ける。

Chim↑Pom

アーティスト

12年の渋谷PARCOでの個展の際、ファサードのネオンサインからウチらのイニシャル、PとCを取り外し、中のギャラリーに展示しました。そのとき屋外サインは「ARO」。こんなことができる施設はなかなかない。あの瞬間、日本一エッジなアートスペースは間違いなくパルコでした!

商業施設であることはわかりますが「行かなきゃ!」とウチらみたいなアーティストが思うイベントが何年か開催されてませんよね。採算を顧みずに狂った表現を発信し続けてほしい。今より全然、もっともっと。

卯城竜太・林靖高・エリイ・岡田将孝・稲岡求・水野俊紀よるアーティスト集団。時代のリアルを追究し、現代社会に全力で介入したメッセージの強い作品を発表する。

山縣良和

writtenafterwards ディレクター
Coconogacco 代表

初めてパルコと関わったのは、僕が企画した「0点ワークショップ」という催しでした。0点のアイデアを目指すワークショップなのですが、参加者も僕も0点ってなんだろう? と一向に答えの出ない不思議な時間になりました。

これからの50年も日本における重要な文化の発信地として、様々な表現者の発表の場であると同時に、多種多様な人たちが交わるパルコ=公園であってほしいと思います。

07年writtenafterwards設立。14年に毎日ファッション大賞特別賞を受賞。服飾表現の研究・学びの場「ここのがっこう」を主宰。

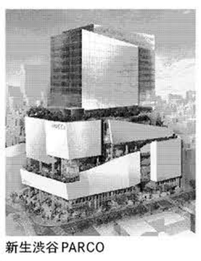
横澤琴葉

kotohayokozawa デザイナー

高校生の頃、家に帰ってから好きな私服に着替えて毎週のように地元の名古屋PARCOに行っていました。ファッションが大好きで、夢を叶えるために23歳でブランドを立ち上げた際に、パルコ主催の若手ブランドサポートプロジェクトに選出していただきました。17年には台風が直撃しそうな中、建て替え工事中の渋谷PARCOでショーを決行したことも忘れられない思い出です。どうかこれからも若手デザイナー、アーティストの一番の理解者であり続けてください。

91年生まれ。アパレル企業にデザイナーとして勤務しつつ「ここのがっこう」に通う。退職後、15年に自身のブランドをスタート。

渋谷PARCOをはじめ新施設が続々オープン!



新生渋谷PARCO

50周年を迎える今年のパルコは、錦糸町、沖縄・浦添、新生渋谷など、新たなプロジェクトが目白押し。新生渋谷PARCOとともに、新パルコ劇場も最新の施設として再開予定です。オール・パルコで盛り上げていく2019年、50年目のパルコにどうぞご期待下さい。parco.jp/50th